

春セミ 5th テーブル総評 C+②番テーブル

総評文責・ジャッジ： 上智大学 4 年 奥田茉佑

1. テーブルメンバー

鈴木（法市 3）、松本（立教 2）、鶴田（フェリス 2）、秋本（成蹊 2）、曾根（立教 2）、平野（明治 2）、鳥飼（早稲田 2）、須永（高経 2）、今村（東女 2）

2. 議論の概要

OP に、鶴田と鈴木が立候補し、投票の結果鈴木が OP となった。NFC までは目立ったごちゃりもなく進み、NFC において、合計 7 つのアイデアが出た。

1 つ目は、鶴田が SQ においていじめに対する d/power が存在するため変えるべきではないといったアイデアをだし、鈴木が DA へ流した。

2 つ目に平野が、教師の数が足りなくなるため教育の質が下がるといったアイデアを出し、鈴木が TG を生徒にした DA として流した。

3 つ目に、曾根が教育を受ける義務があるため c/p はなくすべきではないといったアイデアを出し、鈴木がコンパリへと流した。

4 つ目に秋本が、SQ では 4 種類の罰があるため、APA では不平等になるのではないかとアイデアを出し、鈴木が不平等について、DA としてコンパリで話すとした。

5 つ目に、須永が、教師を辞めさせられると、新たに職を得るのは困難であるため変えないべきだというアイデアを出し、鈴木が TG を教師にした DA として流した。

6 つ目に、鳥飼が SQ ですでに BOE が解決手段を持っているため変える必要はないといったアイデアを出し、鈴木がトリートした結果、some cut となった。

7 つ目に、松本が c/p にはいじめ等の a/law を防止する力があるため、変えるべきではないといったアイデアを出し、鈴木がコンパリへと流した。

NFC 終了後、praca で曾根が、教師を辞めさせることは、生存権を犯すことにつながるため、praca がないといったアイデアを出し、鈴木がコンパリへと流した。

その後 worka で、ゴールを change Mandate としたアイデアを鳥飼が出し、検証途中で終わった。

3. 順位・選定理由・感想

1 位 鈴木（法市 3）

テーブルのための C や議論の推進に貢献する S をすべて鈴木が打っていたため、この順位とする。

おそらく C+テーブルより上の実力である。今後は、自分と同じか自分より上の実力をも

った人とあたったときに、黙らずにどのように立ち向かうかが重要であると感じた。

2位 鶴田（フェリス2）

介入を積極的に行っていたが、カンファメーション止まりのことが多く、議論の推進や論点となる発言がなかったためこの順位とする。

テーブルの2年生の中で最も果敢に挑戦していたため、今後必ず伸びるだろうと感じた。現段階ではSが通るなどの経験は少ないかもしれないが、諦めずに挑戦して欲しい。

3位 鳥飼（早稲田2）

介入を積極的に行っていたが、議論の推進や論点となる発言が少なく、カンファメーションに入られることもあったため、この順位とする。

鳥飼の持ち味である個性的な発言は、アイデアや議論等につながると思うため、プレゼン力を上げて、わかりやすく伝えていく練習をしていくとよいだろう。

4位 平野（明治2）

前半は介入を積極的に行っていたが、後半は介入が少なく、アイデアも他との差異が見られなかったため、この順位とする。

介入量をQ以外の形でも増やしていくことが必要であると感じた。

5位 曽根（立教2）

他者への介入が少なく、アイデアを2つ出しても他との差異にはつながらなかったため、この順位とする。

アイデアを多く持つのは非常によいことだが、今後はそのアイデアがいかにテーブルの貢献につながっているかを考えていくとよいだろう。

6位 秋本（成蹊2）

介入が少なく、アイデアにおいても他との差異がなかったため、この順位とする。

Q以外の形の介入や、他者の話に対しても、積極的に介入していくとよいだろう。

7位 松本（立教2）

介入が少なく、アイデアにおいても他との差異がなかったため、この順位とする。

全体が見えているように感じたため、積極的にテーブルに貢献していく発言をしていくとよいだろう。

8位 須永（高経2）

他者への介入がなく、アイデアにおいても差異がなかったため、この順位とする。

今後は場数を増やして、他者への Q 等を積極的に行うとよいだろう。

9 位 今村（東女 2）

介入がなかったため、この順位とする。

人数が多くても、自分を出していく練習をしていくとよいだろう。

4. コメント

今回のテーブルは、一言で言うと「作業」であったと感じる。誰かがアイデアを出し、テーブル内で唯一トリートのできる鈴木が、時間の許す限りひたすらアイデアを流しているといった風であった。アイデアを出す側も、自分のアイデアが流されるのを安心して見守るといった形で、ディスカッションというよりアイデア発表会といった方が適していた。

実長も言っていたが、アイデアの数で勝負するのではなく、そのアイデアが論点になり得ることを見越して考えることが必要であると感じる。おそらく今の段階でトリートに不安があるためアイデアを数で出す選択肢を選んでいると思うが、今後は様々な立ち回りに挑戦していき、アッセンでは全員一回り成長した姿を見られることを期待している。